

発表題目：

マラウイの開発現場における政策関係者の役割と挑戦：援助依存と調整の狭間から

所属：筑波大学 大学院 人文社会科学研究群

氏名：清水大地

1200 字程度で発表内容を記載してください。

近年の国際開発研究では、政策の枠組み（マクロレベル）と草の根の受益者への影響（ミクロレベル）に焦点を当てた研究が多く、開発政策の現場が人類学的研究によって鮮明に描かれるようになっている。しかし、開発プログラムの評価や枠組みの構築に関与する研究者は、しばしば国際援助機関と密接にかかわる外部コンサルタントであり、利害関係のため批判的な内容を十分に伝えられていない現状がある。一方で、現場にはこれら二者をつなぐ政府関係者が存在し、彼らはドナーから援助を受ける者でありながら、草の根に援助する者たちとして、二重の援助の狭間に立つ。しかしながら、政府関係者はどちらか片方の援助関係の中でしか語られず、板挟みになった彼らの視点は未だ十分に考慮されていない。本研究は、そのような政府関係者の視点に着目し、政策と実践の間にある乖離の再検討を目指すものである。

本研究は、東南部アフリカに位置するマラウイ共和国の社会的保護政策を取り巻く開発援助と依存の実態を政府関係者の視点から分析することを目的とする。社会的保護は近年開発途上国の貧困削減の方法として国際開発機関で現在有力視される政策の理論と戦略の枠組みであり、2009 年以降、国際労働機関が中心となって、社会経済的な脆弱層を支援することが推進され、国家による自立的な政策運用が目指されている。

マラウイは開発途上国の中でも特に多額の援助を受ける被援助国であり、特に社会的保護プログラムの予算の約 9 割が国際機関や二国間援助機関からの支援で賄われている。そのため、ドナーからの強い影響を持ちつつも、間に立つ政府関係者らは枠組みの中でしがらみをもち、時に従順に、時に柔軟に国際的な開発言説を取り込みながら現場のニーズに応えるべく努力している。このような状況下で、現場の政府関係者たちは、ドナーとの調整や協働の中で、どのようにして政策を現地に適用し、同時にドナーからの影響を受けながらも政策の独立性を保とうとしているのかが、本研究の主要な焦点である。

本研究では既存の関連研究に加え、2023 年 1 月から 2024 年 3 月に至るまで筆者が行ったフィールドワーク中に得たデータを参照する。特に社会的保護に従事する政府関係者を対象に行った半構造化インタビューから得られた語りから彼らの視点から政策運用における現実を明らかにすることを試みる。特に、政策の上流で統括を行う者や下流で受益者と密に関わる者たちの語りから、異なる立場からの視点を比較することで、政策の運用過程における複雑な力学を解明したい。

本研究は、開発援助における「もめごとの対処術」の視点を提供するとともに、ドナーと受益国の関係性における新たな調整手法の可能性を探るものである。セミナーでは、これらの知見をもとに、他の研究者や実務者と共に議論を深め、異なる関係者・組織間におけるより効果的な政策運用の在り方について考察したい。